

NIKKEI
ARCHITECTURE

8-26

1985

NIKKEI ARCHITECTURE



いんたびゅー	18	地域主義を忘れず 現状にあぐらをかかず 山本忠司氏(元香川県建築課長)遷居を過ぎて事務所開設するの弁	
実践の記録	48	ふるさとの家づくり 各地に育つ“地域住宅”の芽 建設省がHOPE計画で後押し 静岡県天竜市-----50 愛知県足助町-----56 山形県金山町-----62 山梨県白根町-----66 佐賀県有田町-----69	
建築経済	132	シリーズ●コスト概算の手法——① 設計者にとっての決め手 「部分別」モデルの提案 実践的コストブランディングのために●黒田 隆	
構造	140	建築学会シンポジウム報告 初めて自由討論された 膜構造設計の新しい考え方	
防水	144	シリーズ●防水を見直す——第10回 建設省の「改修設計指針(案)」試用開始 劣化程度、要求性能により工法選定と施工要領を示す	
風土	154	赤瓦に建築の理念を託し 沖縄らしさの復権目指す 浦添市立図書館にみる街づくりの実践	
談話室	180	クリスチャン・ド・ポルザンバルク氏(建築家、フランス)	
ニュース<建築>	88	名護市民会館(設計:二基建築設計室)	
"	114	静岡市立安西小学校(設計:田中謙次建築研究所・企業組合 針谷建築事務所)	
ニュース<住宅>	170	南生田の家(設計:性全慎一)	
ニュース<インテリア>	108	成田東急イン(設計:東急設計コンサルタント、K.I.D. アソシエイツ)	
私の視点	23	建築業界の緊急課題	●大内 建介
判例情報●海外	94	設計を下請けさせた場合の建築家の責任	
新製品レビュー	182	コンクリートの養生	●村上 達
	81	インデックス●躯体コスト指標(公民館、RC 600m ²)	
	24	読者の広場/表紙の周辺/編集室から	
	28	NEWS	
	39	CALENDAR	
	123	工事現況	
	165	海外情報	
	199	法令・行政	
	200	建築・設計界	
	176	図書室	
	183	新製品	

ふるさとの家づくり

各地に育つ“地域住宅”的芽
建設省がHOPE計画で後押し

●静岡県天竜市——p. 50 ●愛知県足助町——p. 56 ●山形県金山町——p. 62 ●山梨県白根町——p. 66 ●佐賀県有田町——p. 69

「地方の時代」といわれるようになって久しい。近年は国の施策全体に、自治体の自主性を促す傾向が次第に色濃く現われ始めてきた。地域づくりとか、町づくり村おこしとかの言葉が、以前にも増して脚光を浴びている。

この5月、地域交流センター（田中栄治代表、東京都港区）が発刊した『ザ・モデル事業』という本がある。

ここには、各省庁が地域づくりに向けて、最近2~3年の間に打ち出した新規モデル事業の数々が収録され、その内容が紹介されている。わずか3年ほどの間に、60になんなんとするモデル事業が誕生している様子には、正直なところ驚かざるを得ない。

同書の中で総合研究開発機構理事長の下河辺淳氏がいうように、確かに今、「モデル事業時代」が到来しつつあるといえるだろう。

「モデル事業時代」到来の背景には、

一つにはひっ迫した財政事情があるといわれる。「量から質へ」の言葉に象徴されるように、わが国の社会経済状況は転換期を迎えていたのだ。また、国際化、情報化、高齢化など、来たるべき社会の変容に向けて、地域社会のあるべき姿を模索するニーズを反映しているともいわれる。

いずれにせよ、かつての新全総（新全国総合開発計画）で見られたような大規模開発プロジェクト方式が、時代になじまないようになってきたことだけは確かだ。そして地域づくりというテーマが浮上するに及んで、一躍、主役に躍り出たのは、各地方自治体の行政マインドであり地場のエネルギーである——。

46 市町村をモデル地域に指定

住宅問題についてはどうか。建設省は、地域住宅計画（HOPE計画）とい

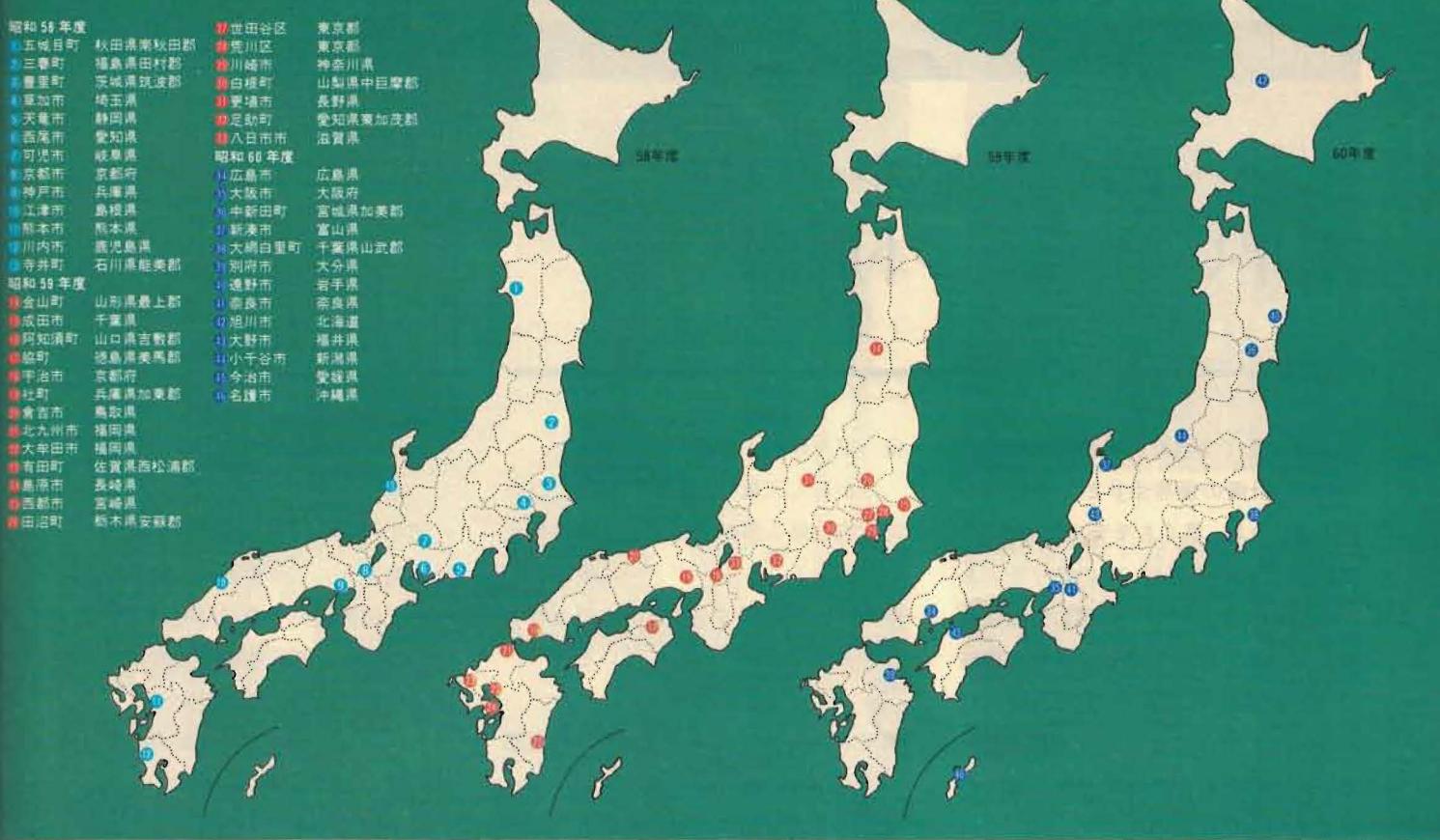
うモデル事業を推進しているが、その趣旨はこうだ。

「地域の住宅事情に精通している市町村が中心となって、地域の発意と創意を生かした質の高い居住空間の整備を進めていく」（59年、建設白書）。

昭和58年度以来、モデル地域の指定を受けた市町村は46に達した（別項地図参照）。「地域に根ざした質の高い住宅づくり」に向けて、これほど多くの地域で自主的な取り組みがなされている。とすれば、わが国の住宅建築もまた、地域主義という大きな潮流の中で、まったく新しい局面を迎えるようとしているとはいえない。

今回の特集で紹介する5つのケースは、そんなHOPE計画の中から特に話題を呼んでいるモデル地域を選び、「地域住宅づくり」の最前線の模様をレポートしたものだ。

モデル地域の中にも、大都市（イン



ナーシティ)型、大都市近郊型、地方都市型と、3つのタイプがある。が、今回は大都市問題がからむ前2者のタイプは除外して、地方都市型に焦点を絞ることにした。大都市の極限状況から離れることで、地域の自然、文化、伝統、産業といった諸相を、テーマとしてより明確に捕らえきれるのではないかと、判断したからだ。

専門家の関わり方も多様

HOPE計画スタート当初は、各市町村側にも、具体的に何をやればよいのか、とまどいもあったようだ。建設省側からも、「地域の側の意識の盛り上がりはもう一つ。運動や絵はできても、行政との関わりでどう進めてゆくかという展望については難がある」といった問題点の指摘もあった。

だが、1市町村当たり500万円という補助金の枠、そして何よりも運動的

色彩の強いニュータイプの事業だったことを考え合わせれば、それも無理からぬことだったようと思われる。

むしろ、46市町村の意識の盛り上がり、そして各モデル地域ごとの多様な取り組み方を見れば、HOPE計画の趣旨は確実に定着し始めているといえよう。「500万円とはいえ、将来の町づくりにとっては、数十億円にも匹敵する効果がある」(有田町)といった高い評価の声さえ、聞かれるようになった。

こうした流れの中で、建築家やプランナーなど、専門家がどのような役割を果たしているかも、興味深いテーマだ。今回取り上げたケースでも、地域と専門家の関わり方はそれぞれ微妙に違っている。

天童市の場合は、東京のプランナーと建築家が参画して、地元工務店・設計者に相当部分を任せると、いわば各専門職の連携プレー型。

足助町の場合は、役所のスタッフが中心になってプランナーの役割を果たし、著名建築家の技術をお手本にするというやり方をとっているので、ノウハウ導入型と呼べるだろうか。

金山町では、東京で活躍中の建築家に総合的なアドバイスを求めているので、顧問建築家型。

白根町は、コンサルタントには東京のプランナーを招いたが、住宅づくりの面では純粋に地元の力で取り組もうとする地元中心型。

そして有田町では、地元に事務所を開いている有効建築家のノウハウを、地元全体に拡げようという地域運動型の事業が進められている。

地域主義の時代にあって、専門家サイドも、新たな職能のあり方を求めなければならない、一つの時代の節目を迎えているようだ。

(細野透、村上正昭、茂木俊輔)

木材への危機感をテコに 素早いプロジェクト展開



木の街として有名な静岡県・天竜市は、「HOPE 計画の優等生」とでも呼べるだろう。今春、早くもモデル住宅の「天竜の家」5棟が完成し、木の香りをふんだんにふりまく街区を実現して話題を呼んでいる。続いて市内のほかの地域に5棟を設計中。50~100戸規模のビッグ・プロジェクトも進行中だ。民間と行政一体となった事業意欲には、めざましいものがある。

天竜市を「HOPE 計画の優等生」と評したのは、計画策定の際、コンサルタントの役割を果たした環境コンプレックスの松野晃・代表取締役だ。

松野氏が称賛するのは、天竜市の市民と行政が一体となった計画推進のエネルギーと、そのスピードである。昭和58年度に、建設省 HOPE 計画モデル指定都市に選ばれると、翌59年度にはさっそく「天竜の家」と呼ばれるモデル住宅の建設に着手した。

その一つは、市の土地開発公社が分譲した山王団地(133区画)のうちの5区画(5軒)。これはこの3月、すでに入居済みだ。同じく公社分譲の大谷北団地(9区画)のうちの5区画でも、設計が終わり、着工を待つばかりの段階にある。

また、民間開発の大規模団地、渡ヶ島住宅地(約500区画)でも、国の補助を導入して、50~100区画程度に天

竜の家を建設する話がまとまった。

ほかにも天竜材を大幅に利用した市営住宅改修工事が進行中で、木レンガや木製ストリート・ファーニチャーを多用した街並みづくり(中心市街地ウッドタウン計画)も進んでいる。

地元木材産業は10年で消滅との危機感

天竜市のこの計画推進のエネルギーは、どこから生まれるのか。一言でいえば、衰微する林業に対する危機意識にあるといつて良さそうだ。

地元の「天竜地域林材業振興協議会」が、昭和58年6月に発表した「振興構想」の冒頭には、こんな言葉がある。

「全国でも屈指の天竜材産地であるこの地が、かつてない不況に見舞われている。住宅着工の急減、外材攻勢、製材技能者の高齢化など、経営の近代化の遅れが活力を欠くこととなり、もしこのまま続くとするならば10年を待たずに消滅せざるをえないのではないかと危惧する。まさに危機である。」

山林業者と製材業者とは、利害が対立し、仲があまり良くないのが通例だ。しかし、ここ天竜では、早くから両者が手を結び林材業振興に努力して来た。昭和57年3月、市内に完成した林業総合センター(本誌1982年5月24日号掲載)は、天竜市の進める山村林業構造改善事業の一貫として、山林業・製

材業双方の組合が共同出資で建設したものだった。

昭和58年の「振興構想」では、そんな姿勢をさらに一步進め、林材一体となって流通販売や商品開発にまで取り組む施設づくり、組織づくりがうたわれている。その第1弾となるプレカット工場が8月初め、林業総合センターに隣接してオープンしたところだ。

体制は着々と整えられつつある様子だが、関係者の危機感が払拭されたわけではない。地元の二俣木材協同組合(木協)副理事長の古川彰一氏(富士天木材・社長)は、ここ数年来、年々減少の途をたどる製材業者について、こんな感想をもらす。

「今までの製材業は周囲の関係者に迷惑をかけない形で閉鎖もできたが、これからはそうはゆかないだろう。」

今後、製材業を続けてゆく以上、業界の体質を徹底的に改善してゆく必要があるという、切迫した覚悟が古川氏の言葉にじみ出る。

木材協同組合が HOPE 計画に共鳴

古川氏が経営する木材会社でも、扱いの6割を外国産材が占める現状という。港湾を通して入荷する外材を扱うのでは、資源地に立地する製材業のメリットは生じない。天竜材を売ることこそが、地元製材業のサバイバルにつながるはずだ。



木を生かした修景が行われた市街地の一画。正面に二俣小学校の壁画が見える

が、今日の流通市場では、地元材は価格面で外材に対抗できない。流通販売体制の整備や、最終商品の開発に取り組まねばならない必然性が、ここに生まれる。中でも木材需要の最大マーケットである住宅が焦点に浮上する。

そんな背景の中で、HOPE計画はまさに渡りに船だった。

「実はそれ以前から木協(二俣木材協同組合)では、市とタイアップして天竜材を生かした地域住宅づくりをしようという計画を進めていた。今回、天竜の家を建てた山王団地の5区画は、そのための用地として木協が分譲を受けていたものだった。着工しようという段階でたまたまHOPE計画が打ち出され、その思想や考え方方が私たちの考えと一緒になので、計画を遅らせ、モデル指定を受けたものだ」(古川氏)。

天竜木材の復権を志す民間グループ

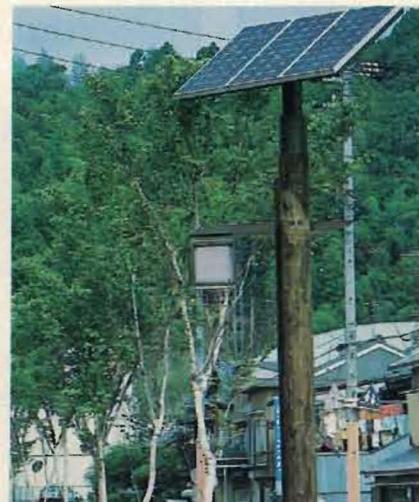
には、このほかに、「木造研究会」(木研)がある。天竜青年会議所のメンバーを中心とした若手グループだ。

青年会議所の元理事長で、現在は市会議員の金指茂信氏が、「木研」のリーダー。活動の経過をこう語る。

大径木が木造を再評価させるとの声も

「木研の発足は5年ほど前。青年会議所の理事長時代に、意欲のある若手木材関係者を4~5人集めてスタートした。動機は、木材をよりコンスタントに、より大量に、価格も乱高下しない形で供給するために、木材業者主導で作る住宅開発を研究するところにあった」。

木研は、内地材の需要低迷の一因として、薄く短くなった木材に対する消費者の不信感に着目した。「デカ木」に立ち戻ることが、その不信感を取り除



同左。その一角に据えられたソーラー装置付街灯



同左。木レンガ舗装の歩道と木製プランター

き、また木材の耐火性、吸湿性、暖かい感触などといった性能を正当に評価してもらうことに通じると考えた。

先進地として、大径木の家づくりを村ぐるみで行っている岐阜県上保(かみのほ)村、通称、大工村が手本になった。上保村の住宅の建築費が坪39万円であるのに対し、木研の場合は、坪45~50万とやや高めに価格帯を設定し、「木の本当の良さを知る1%の需要者向け」(金指氏)に、「天竜デカ木の家」を打ち出してゆく構えを見せていく。

こうした研究活動を始める個人的な動機として金指氏が挙げるのが、やはり危機感である。「天竜に生まれ、製材の音を聞きながら育った私は、木の暖かさに人一倍の想いを抱いている。それと、木材に対する危機感があった」と。



天竜市市長
本多 直彦氏



二俣木材協同組合
副理事長
古川 彰一氏



木造研究会のリーダー
金指 茂信氏



環境コンプレックス
代表
松野 晃氏

市長自ら木の町づくりの先頭に立つ

HOPE計画が見事なスタートダッシュを切った要因には、もう一つ、本多直彦市長を先頭にした市のスタッフの積極的な姿勢もあった。

とりわけ、本多市長の行動力には定評がある。例えば、木レンガ舗装を中心市街地で実施する時など、地元説明会で不安の声が上がると、すぐさま市

長自ら説得に乗り出している。市内の銀行に木材を使った店づくりをもらうことを交換条件に、駐車場用地の便宜を図ったことさえある。

「過疎に歯止めを、町に活気を」をスローガンに、昭和55年、市長の座についた本多氏は、「人口流出と老齢化への対策が、私の最大の行政上の課題だ」と、言いきる。そして、「努力の甲斐が

あったか、昭和33年以降減り続けて来た市の人口は、ここに来てようやく歯止めがかかる」ともいう。

そんな本多市政にとって、木材産業の振興は、企業誘致や宅地開発による人口定住化政策と並ぶ2本柱の一つである。これまでにも林業に対する補助、学校建築に木材製品の使用を推奨するなど、様々な施策を講じてきた。

「HOPE計画が打ち出された時期は、ちょうど私が木の復権や木の文化について語り始め、木の家づくりや木の町づくりを推進しようと提唱したころだった」と、本多氏。

「林業振興を図るには、山間の小自治体の力だけでは、どうしても限界がある。国家的な方策が必要だ」と語る本多市長にとって、HOPE計画の登場は、文字通り「希望をつなぐ手掛かり」になったようだ。

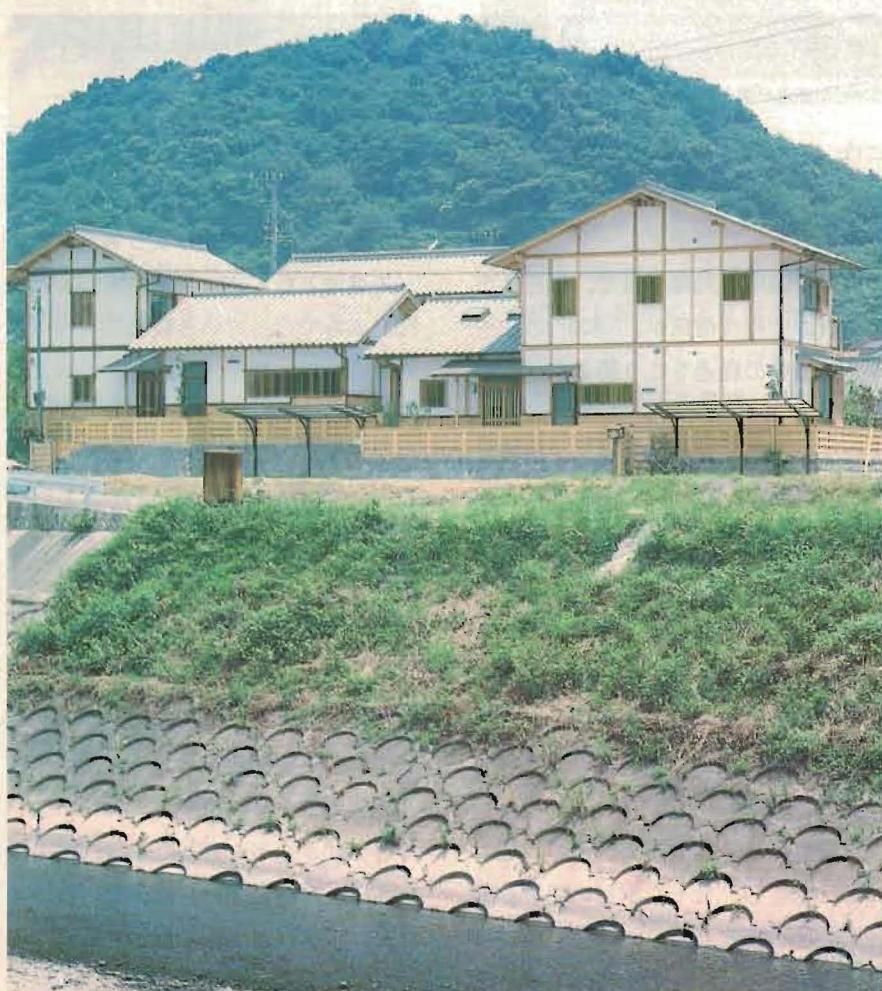
市の計画担当者である建設経済部長の鈴木進氏も、「天竜市HOPE計画に示された構想には、実現もしくは進行中のもののほかに、木製遊具のある遊園地やポケットパークづくりなどもある。これらも順次、時期を追って実現していく」と、積極的姿勢を見せる。

市役所、木協、木研と、官民両サイドからの意識の盛り上がりが、天竜市がHOPE計画を受け入れるための絶好の素地になったといえるだろう。

5軒のモデル建設に計画を集中

ところで、環境コンプレックスの松野晃氏は、計画策定時のプロセスを、次のように振り返る。

「HOPE計画の目的は住み良い町づくりにあるといわれても、最初は天竜市も具体的に何をやってよいのか分からなかった。ただ何かをしなければならないという問題意識が強かった。建設省と相談した結果、町づくりはきれ



天竜川の支流、二俣川沿いに建てられた「天竜の家」(山王団地のHOPEモデル住宅)

いごとだけでは動かないのだから、疲弊した天竜の木材業を何とかしたいという人を中心にはやってもいいのではないか、という話になった」。

この結果、天竜市のHOPE計画は、一般的ないわゆる総合計画策定型より、むしろ人を中心としたプロジェクト志向型になる。つまり、すでに建設を予定していた山王団地の5軒の「天竜の家」に、計画が集中することになった。

「わずか5軒から、どう町づくりにまで拡大するかが計画のポイントになつた。計画推進のための組織を地元につくり、話し合いの雰囲気をつくり、共通の言葉を生み出すところに、苦心点があつた」と松野氏は振り返る。

モデル住宅の設計者には、東京で事務所を開いている女性建築家の山田紘子氏(アトリエ221)が起用された。山田氏が静岡県出身であること、そして住宅の設計に女性の感覚を取り入れたいと考えたことが、起用の理由だった。

設計に先立って、地元の民家や町並みの調査、消費者を対象にしたアンケート調査が実施された。その結果を折り込んで、次のような設計コンセプトが決定された。

①木の香りのする家——木の町の家らしく、杉材を主体にした木造在来工法による家づくり。

②現代風釜屋造り——この地方に古くからある伝統的民家の「釜屋造り」を現代的に解釈して、新しい民家の型を模索する。具体的には、大径木によるがっちりとしたシンプルな骨組、白壁と杉下見板のコントラスト、100年以上耐える家、など。

③人ととのふれあいを生む住まい——近隣とのオープンな交際のできる開放的な縁の空間を作る。

④街並みとしての住まい——個々の住宅の形態より、街並景観として家を



着工間近の「天竜の家」第2弾の建設予定地(大谷北団地)



市営の天神団地では天竜材を仕上げに使った中層住宅の建替工事が進行中だ

考える。変化と統一のある街づくりをするための家。

⑤思いやりのある住まい——子供、主婦、主人、老人という家族の一人ひとりにとって快適な、すみずみにまで神経の行き届いた住まい。三世代型住宅のあり方も検討する……。

監理・施工は相当部分を地元に委任

以上の5項目に沿って、報告書の形で基本設計が示され、次いで実施設計も山田氏の手に委託された。昨年8月に計画を公表して入居者を募ると、即日完売という反響を呼び、10月に上棟、今年3月に落成、一般公開を経て入居という経過をたどっている。

設計のねらいについて、山田氏はこう説明する。

「3世代住宅ということで、広めの家になった。できるだけ豊かな空間の変化を作ろうと考え、軒を深くしてベランダを取ったり、吹き抜けや屋根裏部屋を取ったり、ボリュームは相当大きなものになっている。構造的には真壁構造で、仕上面では天竜杉、一部天竜桧を多用し、ほかの材料も吟味して使っている。一方、台所にはしっかりしたシステム・キッチンを入れるなど設備面でも充実し、全般的にかなりグレードの高いものになっている」。

現代風の民家というと、民家建築の原点に戻り、大径木を使い、釘や金物



山王団地の「天竜の家」。新釜屋造りと呼ばれる民家風デザインに特色がある

を使わない高度な工法の例もある。が、天竜のケースは12センチ角の太い柱を使ってはいるが、見えないところに金物を用いている。「地域に今日、浸透している在来工法、いわば地域のサイズ（保有技術）を大事にすべきだと考えたからだ」と設計者。

施工面では、地元の工務店5社が分担し、監理面では地元の山田設計事務所（浜北市）の協力を求めるという形をとった。

「今回はHOPE計画の趣旨もあって、かなりの部分を地元にまかせた。デザイン的には少々おかしい部分も生じることになるが、細かいところには余り神経を使わないで、ザックリまとめた」と、山田氏。個々の家では設計図と少々異なった出来上がりになったところもあったらしい。

だが、今回のモデル住宅が持つ「町

並みづくり」という役割に関しては、「ほぼ設計通りのものが作られた」（山田氏）と満足そうだ。屋根勾配、軒の出、格子としつくい壁と瓦を基本にした外観、そして木レンガや玉石やマキの生垣によって構成された外構は、ほとんど設計図通りに仕上がった。

価格と広さが地元から問題にされる

こうして完成し、即日完売といった実績も上げ、それなりに評価されているモデル住宅第1号ではあるが、地元では問題点も指摘されている。最大の問題は、価格と広さである。

今回の5戸の販売価格帯は、2690万から2900万円（土地代・外構費・設計料込み）。土地面積60.92坪～72.81坪に対し、床面積が38.83坪～42.83坪。坪当たり建築費は40万5000円から45万4000円という幅になる。建築費

総額で見れば、1636万円から1846万円という値段だ。

天竜市は山間地であるため、宅地が少なく、一戸当たりの敷地が割合小さい。一般に分譲される建物の規模も、モデル住宅よりは小さく、販売価格も2000万円を超えるのは珍しいというのが、地域の感覚らしい。「モデル住宅は少し規模が大き過ぎたし、コストも問題だった」という声は、市当局からも民間からも聞かれた。

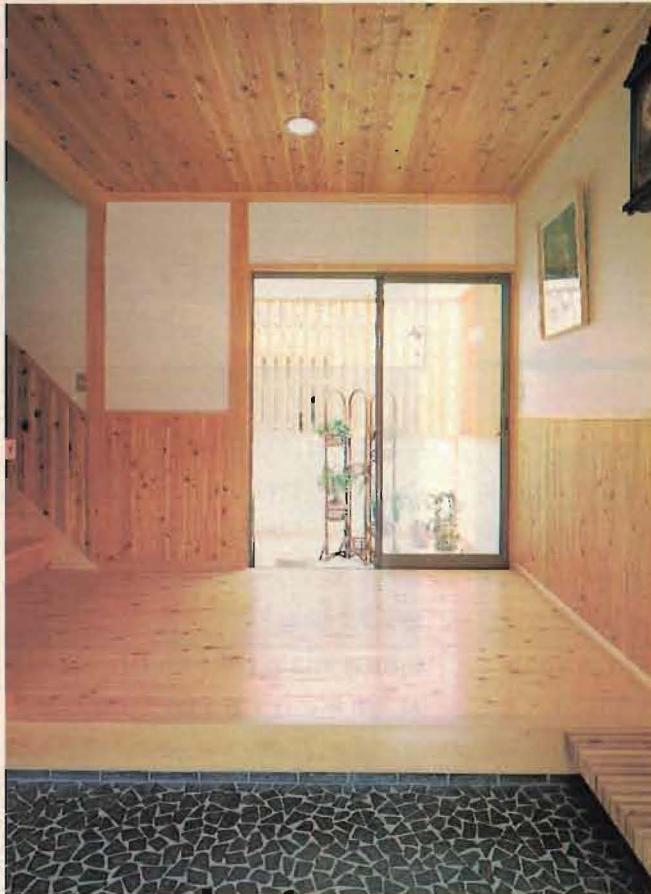
設計者側は、「確かにそれは承知している。しかし3世代住宅を考えると、やはりどうしてもこれくらいの面積は欲しかった。値段の面では、これだけの豊かな空間を持ち、木を多用し、設備費も含んで坪43万円という建築費は、けっして高くはないと思う。プレハブ住宅の価格とも、十分に太刀打ちできるはず」という。



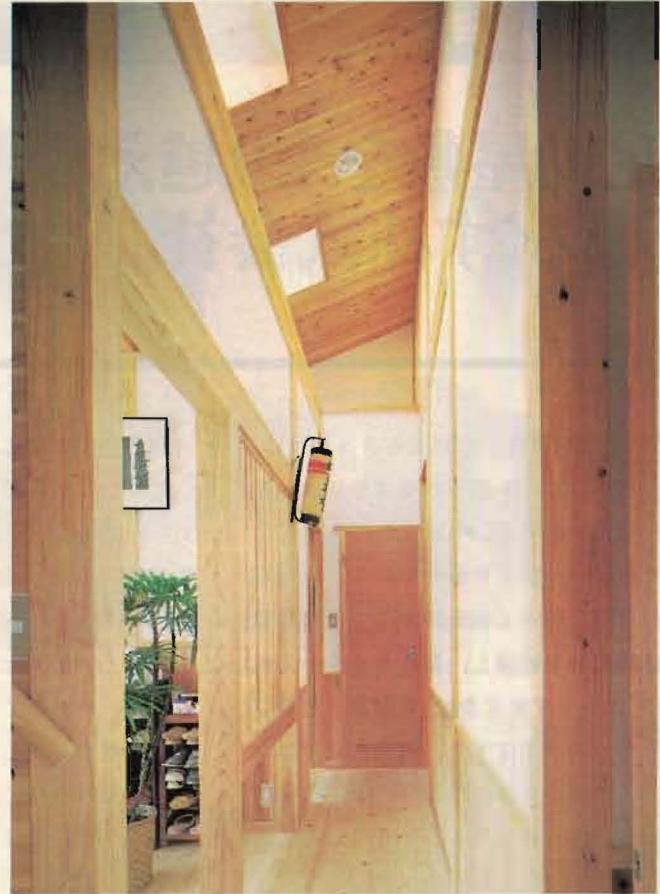
マキの生垣、玉石、杉板の塀などによる外構計画に町並みへの配慮が見られる



「天竜の家」内部。床や天井にも木を多く用いている



「天竜の家」の内観の例。玄関ホールまわり



同左、トップライトのある明るい廊下

が、木協側は、「販売の時に集まった人たちを対象にアンケートをした結果、需要の重心はもっと小さく安いところにあった。木協としては、33坪で建築費1000万程度の規模・価格帯を天竜の家の目標にしてゆきたい」(前出、古川彰一副理事長)とする。

現実にいま、大谷北団地で設計中の5棟は、山田氏の基本設計の大枠は守るとしながら、地元設計者の手で規模を縮小した形で実施が進められている。真壁は防水上に不安があるとして大壁に飾り柱を付けるといった工法上の改変や、柱径を細くするといった手段も講じられているという。

建築家サイドの発想といえば、当初の設計主旨が曲げられてゆく様子は好ましい姿ではないだろう。が、地元が自らの手で自らに合った家づくり、町づくりを進めるのであれば、HOPE計

画の趣旨は守られているとして良いのではないか。

少なくとも次のような地元関係者の声を聞けば、HOPE計画が確かなインパクトを地域に与え、天竜市がしっかりと足取りで前進しつつあることを感じさせられるのである。

次の段階で町づくりコンペの構想も

本多直彦市長——「天竜の家の今後の課題は、まずコストダウンにあるといえるだろう。大量に売れれば、材木はすぐ高くなる性格があるけれども、大手住宅メーカーに対抗できる安定した値段で供給する必要がある。地域の工務店づくり、組織づくりも課題となるだろう。今回のモデル住宅は、東京にいるコンサルタントや設計者が、例えば新釜屋造りを提供するなど、地元で忘れられていたものを掘り起こして

くれた点で大きな効果があった」。

古川彰一・木協副理事長——「天竜の家が今後、どんな価格・規模で、どのくらいの量が売れるかの見通しは、50戸程度の規模で町づくりを行う次の段階でしっかりと立ててゆきたい。その場合、8月にオープンするプレカット工場の生産能力(年産600棟)が一つの指標になるだろう。この段階では、町づくりコンペを開いて、専門家の英知を集めようという腹案もある」。

山田滋美氏(モデル住宅建設で監理を行った現地の設計者)——「モデル住宅建設は非常に楽しい経験だった。隣り合って施工を進めた工務店・大工は、本格的な木造建築ができると燃え上がり、腕を競い合った。統一された外観の作られ方、大胆な木の使い方など、こんなやり方があったのかと、設計者としても大いに刺激を受けた」。